
椿と雨の匂い

ヌーーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

椿と雨の匂い

【Nコード】

N5695U

【作者名】

ヌーロン

【あらすじ】

目が見えない。耳が聴こえない。その不便さは計り知れないが、鼻が効かないなんて、大したことない。匂いも香りも生活していくことに関してなんてことも無い。だからそんなに意識されない。気にされない。それでももし、もしもの事があつたら。そんな話。

君はどう思うだろうか。外は土砂降り。手元には白いビニール傘が一本。ついでにカバンの中にはいつも予備のために持っている折り畳み傘も入っている。学校の玄関で靴を履き替えて、傘立ての中に目をやると、ビニール傘は一本たりとも残っていない。ブランド傘と、天命を全うした亡者たち。ちょっと拝借、と気軽に持っていくことができるものはない。放課後になって少し経つから、ビニールのような、所有者がだれだか特定しにくいものはひとつ残らず利用されたのだろう。だから傘は玄関の傘立てではなく、各教室の雨具かけのフックにでもかけておくものなのだ。俺や、ある程度経験値をためた生徒たちは、玄関で水を切ってから傘を自分たちの教室へと持っていく。だけど、経験が足りないものや、今日くらいは、とめんどくさがったり油断したりで傘立てを使ってしまった奴は、そもそも傘を持ってきたくない奴らの餌食になるのだ。

入口の前にはいかにも雨宿りをしていますよ、という体の同級生がケータイをいじりながら扉にもたれかかっていた。ここで質問。君ならどうするだろうか？手元にあるビニール傘を差し出して自分は予備の折り畳み傘を使う。これが一つの選択肢。もう一つは、知らぬ存ぜぬを通してビニール傘をさして歩き去る。道徳的な正解は間違いなく前者。だけど、俺の正解は迷うことなく後者。傘を差し出すなんて、どれだけ勇気がいることか。もしかしたら雨宿りをしているというのは俺の勘違いで、入らぬ世話だという要素があるうえに、小心者の俺としてはそんな社会的対応は荷が重い。だから、この条件では、全く俺の心は揺るがない。しかし、ここで条件が追加される。この同級生というのは俺の前の席の奴だった。今日は秋休みが終わり、2期制での後期が始まる始業式。いろいろな必要なプリントが配布されて、それが前の席から後ろの席へと回されていく。その単純作業が何度か続いていたせいもあり、俺はぼけっとして注

意力に欠けていた。そのせいか、俺は前の席から回されたプリントをつかみ損ねて、周囲にばらまいてしまったのだ。プリントたちは結束力が欠けたまま四方八方に逃げ惑い俺は急いで拾い集めようと席を立つ。そこで、プリントがばらまかれたことに気づいた前の席の奴は一緒にプリントを拾うのを手伝ってくれたのだ。と、言うことで、俺は今日の前でいかにも雨宿りをしている体の同級生に少々借りがあった。だけど、こんなの、気にするほどのものでもないという自己中も多いはず。もちろん俺自身もその恩知らず。だから常の俺なら、まだこの条件下でもその同級生に構わず一人で帰るはずである。相手には俺が折り畳みを所持していることなど分からないのだから、相手からすれば、俺の所持している傘は一つのように見えている。傘を借りられる状況ではない。俺はまだまだ道徳的行為は選ばない。しかし、ここでまた条件が追加される。

『○○君。今帰り？あ、傘盗まれなかったんだ。いいなあー。今日はちょっと油断しちゃってさ。まいったまいった。○○君って、折り畳みとか持ってたよね？悪いんだけどさ、今日だけ貸してくんないかな？』

その同級生が俺に声をかけてきたのだ。

軽いノリから放たれた言葉は何とも今の俺の装備を看破していた。これがとどめの条件である。俺は先ほどの選択肢に目を戻す。傘を貸すか貸さないか？いくら小心の俺でも、というか、小心だからこそ、相手からこちらに明確なヘルプがあるなら別に貸してやらないこともない。それに、ここで貸さない方の選択肢をとれば相手はともかく俺は後味悪くなるし、近い席であることがさらに際どいドレッシングだ。まずさ100倍同級生に対する後ろめたい気持ち。そんな気持ちが長く続くわけでもないけど、これでプリントの恩をチャラにできたらと思うってここは真摯に対応するのは間違いではないのかもしれない。そうだ、ここまで来れば傘を貸さない方が間違っているのだ。周りに誰かがいるわけでもないし、堂々と傘を渡せばいいのだ。手元の傘は最近買ったものなので、汚くはなく、人に貸

してもいいレベル。鞆の表ポケットに手で触れて折り畳みの感触を確かめる。それは教科書どもに圧迫されて、隅っこの定位置にポジショニングしていた。丸い取っ手を手でなぞり、しっかりその存在を確認してから、遅れがちに問いに答える。

俺は傘を差し出した。

「あの。」

「何？」

「土崎さんの家ってこっちななの？」

「違うけど、今日はどうしても買いたいCDの発売日です。家に帰る前に寄ってく予定だったんだ。」

興味なさそうに合いの手を入れておく。CDの発音がとても良かった。

傘を貸したらさっさと別れてくれるものと思っていたから、俺が折り畳みを取り出すまで待機して、俺と共に歩き出したことについてはとても困った。俺がその行動の訳を聞いてみると、曰く、「傘借りた身なのに、貸してくれた人を置いてさっさと行っちゃうなんてなんだか嫌な奴じゃん。」とのこと。そしてそのまま俺の斜め後ろについてきている。俺にとってはこっちの方がずっと嫌だ。俺はこういうことに免疫がないのだ。別に何もしなくてもいいのだろうが、何かしなくてはとも思ってしまう。傘を貸すという善行をしたのにこんな仕打ちに会うなんて。世界は歪んでいる。

「あ、あのさ。土崎さん。」

「んー？」

「どうして俺が折りたたみ持っているって知ってたの？」

とりあえず、当たり障りの無い会話をしよう。そう思って口火を切る。土崎さんは俺の問いに困ったように笑った。

「気を悪くしたら謝るけどさ、今日、ホームルームが終わって席を立つときに偶然目に入っちゃったんだよね。盗み見たみたいで、やっぱ嫌だったよね？」

「ん、別にいいけど。」

「そっか、ありがと。」

苦笑の苦味がとれて笑みがまるくなる。こっちのほうが自然だと思った。

「今日は久々のシングルだからさ。すごい楽しみで浮かれてて、帰りも超特急で帰ろうと思ってたから傘立てにそのまんま置いてたんだよね。そしたら放課後呼び出しくらっちゃってさー・・・」

その後、相手は勝手にしゃべるだけで、こちらにあまり話題を振ってこなかった。俺としては、あれこれ話題について頭を悩ませることがないので助かったところだ。土崎さんの話のところどこに合の手を入れながら歩く。話の内容は、今日発売のCDについてだった。俺にはまったく興味のない歌手だったので正直に言えばついていけない話題だったが、無難な対応をとっておく。雨の中、傘もさしているのに視界は狭い。そして、気が付けば土崎さんは俺の横に並ぶようにして歩いていった。そのことには気がついたものの、できるだけ目を合わせないように前を向いて歩く。狭い歩道の上、傘と傘がぶつかりそうになって背筋が凍る。実際はそんなことがあるわけはないが。そういうふうに分り切るのだが、体はこわばる。そんな時間が10分ほど続いた。

生花店の横をすぎる。家はまだまだだけど、ツタヤはもう目と鼻の先。そこからサヨナラバイバイだ。相手の話も、いつでも終わりに入れるような感じのぼつぼつした小ネタになってきた。俺はほとんど流して聞いているので、どんな話の途中だろうが、目的地にたどり着いたら話の流れもその場の空気もバサッと切り捨てて歩き去るけど。角のコンビニを曲がったらそこが目的地。俺の家はそこからまた20分。自転車に乗ればあっという間の距離でも徒歩になると猛烈にだるい。それに俺も雨は嫌いなのだ。ちくしょう、何でこちらの取り締まりは厳しいんだ。他の地区なら傘さし運転バリバリいるのに。

目的地に着いたので、適当に言葉を交わしてスタコラ逃亡を図ろう

としたところで名前を呼んで呼び止められる。なかなか思い通りに行かない、と思って振り返ると、呼び止めた方は雨どいのちょうど前で傘をさした状態でこちらを見ていた。

「傘ありがとね。助かったよ。明日ちゃんと返すから。」

「気にしないで。それじゃ…」

「雨って嫌だよね。外に出れば濡れるし、家の中でもじめじめするし、それに私偏頭痛持ちだから、微妙に頭痛くなるんだよね。今日もずっといらいらしてて。」

「はあ。」

それじゃあ、ばいばい。という3秒間を遮り、話が割り込んでくる。その瞬間、一瞬だけいらいらした。別にそのいらいらした気持ちを俺と共有しなくてもいいだろう。俺とあなたは今日が初対面のはずだ。しっかり限度を弁えてほしい。この人は少しフレンドリーがすぎる。

土崎さんの胸部が膨らむ。目を閉じて、深呼吸をしているみたいだった。

「でも、雨の匂いは好き。なんか澄んでるよね。水は匂い成分を吸収するんだって。だから、雨が降っている時だけ、本当の匂いが分かるんだよ。」

そして深呼吸を続ける。実にいい顔でいらっしゃる。とても気分よさそう。今、自分自身の顔がそれほどいい風になっている自信がない雨の中、傘をさしながら雨の匂いを嗅ぐ姿は、なんだか全体的に澄んでいるような印象を受ける。何物にも染まらない本当の色がむき出しになる。そしてその色は、限りなく透明なようで、全然薄くはない。しっかりと頭の天辺から足の指先まで染まっっていて、それでも何色かはつかめないような不思議な色彩だ。

「土沢君はどんな臭いが好き？」

またもやボーっとしていたらこちらに話が降られてしまう。俺の好きな匂い。香り。嗅覚を刺激する化学成分。どんな匂いが好きかって？そんなことを考える奴がいるのか？いや、いるだろうが、少な

くとも今の俺は好きな匂いがどうのこうのとは考えない。

「椿の花とか。」

「へー、椿ね。いい匂いなんだ。じゃあじゃあ雨の匂いは？」

「雨の匂いは、分らないよ。」

雨のせいとか気温が低い。早く自宅に帰らせてほしい。

次の日、これまた微妙に雨が降りそうで降っていないという曇り空。天気予報は降水確率40パーセントと言っている。非常に際どい天気だ。それでも、俺の傘は今、俺の手元には存在しない。傘を持っていくか持っていないかで悩む必要はない。天気も、登校まではぎりぎりもちそうだ。とりあえずは早歩き気味に学校に行こう。そう思い至って玄関を出発。庭先の雑草が朝露を多分にまとっていた。割と近い時間まで雨が降っていたのかもしれない。雨のせいとか、それとも単なる朝の低気温のせいとか、空気が涼しげで肺に心地よい。これはまあ、なかなか、悪くない。若干多めに息を吸って登校を始める。

学校に着くとタイミングを見計らったかのように雨が降り出した。今日も降水確率40パーセントとは思えない降り様だ。数年前に近くに立った工場が理由の煙くさを消臭しようとしてもしているのか。化学成分がしみこんだ雨。何とも気持ち悪い響きである。やっぱり傘は必需品だ。

「ごめん！本当に！」

朝から俺に頭を下げてくるクラスメイトがいた。そろそろ朝のホームルームも始まる5分前。そいつは教室に入ってきた。なんだかひどくこちらに目を向けていたようだったけど、もうみんな席について、朝の喧騒も収まってきている時間帯。だから、話しかけられてみんなの注意がこちらに向くのが嫌だったので話しかけられないように視線は完全にシャットアウトしておいた。そのおかげか、ホームルームの微妙な静けさの中では何も話しかけられることはなかった。

た。そしてホームルームが終わった直後。委員長の号令の後で一氣に教室が騒がしくなる。みんなが席から離れていつもつるみ合っている友達同士が集まる。その波も高まってきたところで前の席の奴がこちらを振り向いた。「ごめん、土沢君。今日も傘借りていい？」

話は今朝のことから始まった。朝、いつも朝のホームルーム10分前に学校に着くように緻密に計算された生活パターンを24時間、年中無休守り切っているこいつはいつも通りの時間にいつものように起床した。そして、寝起きでぼやける意識の中テレビをつけると天気予報のお姉さんが目に映る。お姉さんは今日の降水確率を40パーセントと言っていた。これはうちと同じだ。こいつは降水確率は半分を超えなければ雨は降らないものと考えているらしく、今日は傘無くていいかと、ぼんやり考えながら朝のかくかくしかじかもろもろを終えて玄関へ。それから玄関先の傘が目に入り、昨日俺から傘を借りていたことを思い出したのだという。思い出せて良かったーとホッとしてから傘を手取る。ドアを開けてレッツゴー。したらドアを開けた瞬間に雨が降り出した。こいつの家から学校に行くまでの道にコンビニ等々、傘を買える店はない。それよりも何よりも、朝はゆったり派であるこいつに登校時に傘を買うという時間は残されていない。と、いうことで、結局俺の傘を使って登校。今日の雨は、小粒ながらもなかなか止みそうにない様子。そこで、今日も傘を貸してほしいとの依頼だった。

「別にいいよ。俺、折り畳み持ってるし。」

「本当？ありがとう。助かるよ。じゃあ、今日借りたら本当に返すから。」

「べつ、100円傘にそんなに限らなくても。あげてもいいけど。」
「いやいや、今度は本当に返すから。」

そんなやり取りを2、3繰り返してから俺が折れた。なんだかしつこい性格だった。良く言えば律儀とも言えるけど、100円傘にここまでこだわらなくても良いのにも思う。でも、返してくれると言うなら、まあそれにこしたことはないわけで。向こうがどうして

もというなら、こちらにそれを拒否する道理はない。

「で。」

「ん？どうかした？」

「土崎さんはどうしてまた付いてきてるの？」

授業終了、帰宅時間。特に学校に用も無く、友達からの誘いもなかったので、俺は放課後は家に帰って有意義な時間を過ごすことに決めていた。外は雨がしつこく振っている。折り畳みの出番だ。この傘だと、サイズのせいで風が吹いている日だと力不足感は否めないけど、今日はほぼ無風だ。この調子なら大丈夫。靴を履き替えて玄関を通り過ぎると、後ろから何者かがせまってくる気配がした。駆け足の音がだんだん大きくなってきて、近づくにつれて減速する。俺は顔を隠すように傘の角度を変えた。

「土沢君じゃん。途中までご一緒しよう。」

何でまた付いてくるんだ。と、こんなことがあった。

「だから途中まで一緒に行こうって言ってんじゃん。土沢君ちってこっちの道なんでしょ？」

それはそうだ。それはそうなのだけど、俺はやっぱりこんな状況に免疫はないのだ。だから付いてこられるのは非常にうっとおしいのだということを理解してほしい。

「私、やっぱり長い目で見て、100円傘じゃないちゃんとした傘を買った方がいいと思ってさ。確かあっち方面にあったじゃん？そういう傘買える店。」

それを聞いて嘆息する。その店はうちの家の斜向かいだった。つまり、俺は下校の30分間、こいつに付きまとわれることになるのだ。誰か、誰かいなかったのか。一緒に行く女子とか。いないか。傘を買うためだけに遠回りをしてくれるほど、暇なやつはそうそういないのかもしれない。

帰路、やっぱりこいつは一方的にしゃべり続けていた。息を吸うようにしゃべって息を吐くようにしゃべっている。こいつは1分間しゃべらないでいると死んでしまう病にでもかかっているのだろうか。まあ、授業中は静かなのでそれはない。それに、うちの学年にはスピーカーと呼ばれる音量スイッチが壊れたステレオ並にぺらぺらべらべら話している奴もいるのだ。それに比べるとこいつはまだマシなんだろう。

「雨は、神様の流す涙ってのは良く聞く話だね。」

「もう、そんな話にロマンを感じる年じゃないよ。」

「私は乙女だからね。花も恥じらう17歳。」

それは花も恥ずかしがるだろう。それだけ痛い発言をしているのだ。言動には気をつけてくれ。

一方的に気まずい思いをして、こいつはともかく俺は底抜けに気疲れしてやっとのことで家に着いた。こいつの用であるブランド傘店にもだ。俺の精神HPは限界だったが、マラソンでゴールが見えた時に出る底力のようなものが湧いて来る。回復の呪文だ、ベホイミベホイミ。

「じゃあ、ここで。」

そう言っただけ俺は家に入ろうとする。そしたらまた名前を呼ばれて帰宅を妨げられた。何だこいつはストップパーか。最後の砦か。

「もしかして、土沢君の家ってここなの？」

そいつがうちの表札を指さす。俺は肯定の意味でうなづく。

「そうなんだ、へえ。」

「それじゃ…」

「じゃあ、傘買ったらすぐこれ返せるじゃん！」

それじゃあ、また今度、という4秒間を待たずにこいつはまた話を割り込ませてきた。分別が無い。見境がない。

そいつは手に握っている傘をアピールしてこちらを見る。数秒思考。確かに、ここで傘を返してくれるならそれもアリか、とも思う。

「確かにそうだね。じゃあ、そういうことで。いい傘見つかるといいね。」

「そうだね!」

そして奴は店内へと消え去った。ベホイミベホイミ。もう少しの辛抱だ。

家に帰るなり制服をハンガーにかけて部屋着に着替える。すさまじく地味なスウェットだけど、別に傘返してもらっただけだし、気にしなくてもいいか、と思考する。部屋着にデザインを求める奴なんてそうそういないはず。求められているのは着心地だ。部屋で音楽を聴きながら待つことにする。イヤホンをセットして今日中に済ませなければならぬ課題のプリントに目を通す。でも通すだけ。手はつけない。それから何をするでもなくボーっとする。こんな時間が至福である。すごく安らぐ。さっきまでの精神ダメージが嘘のようだ。もうずっとこうしていたい。ひきこもりになってでもいいからこうしていたい。だけど、そこまでしてこうしていたいというのも非常に痛い状況なので、俺はそこまで踏みとどまれる。

しばらくしたら聞いている音楽にイヤホンの外から雑音が混じる。インターホンだ。土崎産が傘を選び終わったんだろう。音楽を止めて腰を上げる。部屋から出ると、爺ちゃんが玄関の対応をしている声が聞こえた。階段を降りながら髪をなでつける。

「おっ、毅彦。お客さんだ。」

「お客さんって、傘返しに来ただけでしょうが。」

「何言ってるんだ。ちょっと上がってもらえばいいじゃないか。」

「え! いいんですか?」

「何言ってるの爺ちゃん。土崎さんもそこは遠慮するところでしようが。」

突っ込みを入れるも、うちの爺ちゃんは非常に頑固だ。頭が固い。道行く子供がいさつをしなかっただけで、最近の子供は、と不機嫌になるほど理不尽な考えに縛られている。この人をうちにあげる

とか、勘弁してほしい。あげて、その後はどうするんだ。爺ちゃんが相手してくれるのならそれも構わないけど、きつとそこには俺も同席するんだろう？というか、同席させられるんだろう？今日は主に帰り道で人疲れが激しいんだ。後はもう自分の世界に閉じこもりたい。

そう願っても、土崎さん自身も家にあがりたがっていて、数の上では2対1。ここは民主主義の国である。多数派が勝つのが定石だ。少数派のかすかな抵抗の後、ついには客人は家にあがり、爺ちゃん、この人はお前の客だろうがと意味の分からないことをぬかして自室へと去ってしまった。居間には俺と土崎さんだけが残された。

「いやあ、悪いね。ちよつと歩き疲れちゃってさ。」

どうかゆっくりくつろいでいてください。お一人で。

この人がいると逆に俺の方がくつろげないのだ。なぜに？俺の家なのに？優先順位が間違っている。

「あつ！そういうえば、庭先に椿の花見つけたよ。椿ってこんな時期に咲いてるんだね？結構寒いのに。」

「椿は秋から春までなんだよ。まだまだ続くよ。」

立ち上がって暖房のスイッチをつける。つけた瞬間に暖風が天井へと駆け登る。

「そういうえさ、土沢君嘘ついてたでしょ。」

「嘘って、何？」

もう一度座りなおしてから自分の格好がスウェットだったことに気がつく。でも、今さらという気もしたので特に気にしないことにする。

「椿って香りが無い花なんですよ？土沢君、好きな匂いって聞いたら椿って言ったの、あれ嘘でしょ？」

正面から睨まれる。睨んではいないのだろうが、しかめっ面というやつだ。

確かに、椿の花には香りが無い。椿といってもいろいろ種類があるので全てが全て香りが無いというわけでもないのだが、大部分はそ

の香りの無い花に含まれる。椿の花は赤色が主体でその派手な見かけから香りが必要ないのだと言われている。派手でも優雅だとか、上品だとか、そんなことを言われる花ではあるが、俺にとってあの色は毒々しいだけだ。

「好きな匂いなんて考えたことなかったからだよ。とっさに出てきたんだ。」

「それって、適当に答えてたってことじゃん。嫌だなあ、そういうの。」

「ごめんなさい。」

間髪入れずに謝った。こういう時は素直に謝るのがセオリーだ。土崎さんのしかめっ面が笑みに変わる。俺は匂いの話に関心が無いので話題を変えようと別室にいる犬のところに行く。名前はサブロー。養子だ。友達からもらった。名前から勘違いされるがこいつは5番目に生まれたらしい。うちの親が野球選手のサブローのファンなのだ。野球関連だったらいちローの方がメジャーなので、この由来を聞かされた人はたいてい微妙な顔つきになる。そしてさらにどうしようもない勘違いがある。

俺が別室に移動すると、どうしたの？という具合に土崎さんがサブローがいる部屋まで付いてきた。

「わあ、かわいい。」

そして犬を見て唸る。かわいいと言ったのはきつとサブローのことじゃないだろう。サブローは御年17歳といういわゆる老犬だ。もう既にかわいいという年齢は過ぎている。かわいいと言われたのは別の犬だ。

「土沢君。この子たち、みんなこの犬が産んだの？」

「そうだよ。」

「すっごーい。」

かわいいかわいいと賞賛されていたのはサブローの乳を飲んでいる子犬たちだった。全部で4匹いる。そう、サブローは4児の母なのだ。つまりサブローはメスだった。まことに残念なネームだ。ごめ

んサブロー。

それからサブローの名前とその由来を放して、予想通り微妙な顔をされた後は、適当に犬とじゃれあわせておいた。勝手に時間をつぶしてくれて俺は非常に助かった。サブローとその子供たちに感謝感激。

「すごいなあ。でも、これだけいたら育てるの大変じゃない？」

「子犬は今飼い主を探してるよ。うちは愛犬家ってわけじゃないし、サブロー以外はほかに出すんだ。」

サブローはもう年だし、愛着もあるから手放さないけど、その子供は経済的に不安なのだそうだ。もう既に3匹は貰い手が見つかった状態だ。サブローと子犬たちは何も知らないで親子をやっている。だけど、そろそろ母乳を卒業する時期になる。そしたらみんなお別れなのだ。

サブローが子供の匂いを嗅いでいる。それに親の愛情が見えたような気がして目をそらした。

「お邪魔しちゃったね。傘返すだけなのに。」

「邪魔ってわけじゃないよ。やらなきゃいけないことがあるわけでもないし。」

性根を言えば、家にいるだけなら邪魔ではない。ただ、俺にかかわってこられると精神的に疲れるのでそこだけどうにかしてくれれば他は本当にどうでも良かった。玄関先に立って傘を手にする。新しい傘は無地の水色だった。新品である証にしっかり水をはじいている。戸をあけてからそいつがこちらに向き直る。この人は何をするにもワンクッション何かを置きたい人のようだ。振り向いた顔は何かを伺うような感じを含んでいる。

「土沢君。また来てもいいよね？」

背筋がぞっとした。目の前の人は控えめに笑っている。いいかな？ じゃなくていいよね？ と。あなた来る気満々じゃないか。何で。俺

は人疲れするタイプなの。自宅は俺が心から寛げる場所なのに、あなたはそこまで侵食するつもりか。

それでもそこは気が弱い俺なのである。ここで来ないでほしいなんて言えないし、というか普通の人ならそんなことは言わない。またどうそ、と言うのが常識で、セオリーなセリフだ。勘弁してほしい、勘弁してほしいけど、俺にはその意思を伝えるすべはない。

「サブロー見に来るなら、いいよ。」

そう言ってその日は土崎さんと別れた。

それから、土崎さんは頻繁にうちに来るようになった。週2回である。1週間に二回もだ。考えられない。アンビリーバボー。これは奇跡体験だ。そしてうちに来ると決まって土崎さんはサブローたちの相手をしていた。いや、土崎さんの相手をサブローたちがしてくれていたと言った方が的確だ。うちは両親共働きなので、平日にうちにいるのは俺と爺ちゃんだけである。爺ちゃんは、お前の客だろう、と言って相手にしてくれない。俺の客じゃねえよ。サブローたちの客だよ。俺は決まってそう反論する。それでも他人をうちで一人にさせておくのはまずいので、サブローたちとじゃあっているうちはいつも俺が同伴している。迷惑だった。とても迷惑だった。それでも言えない。小心だから。

「雨の匂いなんて、結局雨そのものの匂いじゃないんですよ。雨が匂いを吸収して、その後に残った匂いなんだから、雨の匂いっていうよりもそりゃ空気とか土地の匂いじゃん。」

「ってことはその場その場の雨の匂いがあるってことだね。その人その人の雨の匂いがあるっても言うことができるかも。なんかいいじゃんそういうの。」

「いや、だから雨の匂いなんて無いんじゃないかって言いたかったんだけど。」

その日は雨が降っていた。土崎さんは例の水色の傘をさしてやってきた途端、いい匂いだったとおっしゃった。雨の日は好きじゃない。

だから、雨の匂いが好きなんて言ういかにもロマンチストな発言をしている奴の妄想を砕いてやろうと奮闘した結果がこれだった。口は達者じゃない方だから仕方ない。俺はすっかり頭の中で練ってか言葉にするタイプなのだ。それからいつものようにサブローがいる部屋へと行く。ちなみにいつからか俺が部屋のドアを開けることはなくなり、土崎さんが勝手にサブローの部屋に入っているようになった。この人にとってのう치가、勝手知ったるなんとやら状態になっている。この人の、うちへの入り浸り具合が示されているように怖い。

「あれ？」

後から部屋に入っていくと土崎さんがサブローたちの空間を侵食していた。サブローが唸っている。

「サブローが嫌がってる。噛まれるよ。」

「ああ、ごめん。ねえ、1匹足りないんだけど。」

しゃがんでいる視点からみあげられる。確かに、サブローの周辺の子供は3匹に減っている。

「前も言ったでしょ。里親のここに行っただよ。うちの親父の後輩だって。」

「そっか、行っちゃったんだ。」

それから奴はしばらくぼんやりした様子でサブローたちを眺めている。俺はついついその横顔を視界に入れていて、そんな自分に気付いて慌てて視線をそらす。

「サブロー、寂しくなるよね。」

そいつはこちらを向いていない。だからそれはサブローに言ったのかもしれないと思った。このメルヘンにはついていけない。いつもならそんな言葉が頭に浮かぶ。でも、今日は不思議と嫌悪感ばかりわきあがってこなかった。サブローが寂しくなるというのは、間違いなく本当のことになるだろうからだ。そしてそれは、サブローの子供にも言えることだと思った。

席替えが起こった。土崎さんが前の席であるというポジションからの解放の日だ。気分がすがすがしい。外の天気も、こんな日を祝ってくれているかのように晴天だった。最初の頃、俺は土崎さんと学校ではあまり話さないようにしていたのだが、土崎さんが俺の家に来る回数が増えるに連れ、向こうからどんどん話しかけてくるようになってきていた。俺としては、周囲の目が気になって毎回のようにはヒヤヒヤさせられていたのだが。変更後の席は廊下側の4番目。この席が良いのか悪いのかというと、ぶっちゃけどっちでもない。俺にとって席替えとは、席の周りの人が重要なのだ。だから俺の席のポジションが一番前だろうが後ろだろうが、そんなのは関係ないのだ。そして、俺の隣は嬉しいことに1年からの友人である誠だった。あの、新撰組好きでしょ？という問いかけを何千、何万と浴びせかけられる名を持つ誠君だ。その質問にはいつも『嫌いじゃない』と答え続けてきた誠君だ。彼とは素直な意味で非常に仲良くして貰っている。前後斜め共に嫌いというほどの奴とは隣り合わず、今回の席替えはなかなかのものだった。

授業が終わって昼休み。誠君が寄ってくる。昼飯を一緒に食べようということらしい。俺はこの申し出を喜んで受諾した。

「お前と可奈歌って付き合ってるの？」

「……………そう思った理由を聞こうか。」

昼飯の弁当を広げたところで唐突な質問が飛びこんできた。ちなみに可奈歌というのは土崎産さんの名前である。俺と土崎さんが付き合っているだと？冗談は大概にしてほしい。寝言は寝て言えという言葉もある。

「だってさ、時々一緒に帰ってるじゃん、お前ら。それに可奈歌がお前んちによく行ってるってみんなが言ってた。」

誠が弁当に箸をつけ始める。俺は頭をフル回転させて言い訳を考える。

いつかはこんな噂も立つんじゃないかという予想はしてた。なんてありきたりな噂なんだ。そしてよくありそうな内容だ。この話題は

本当だった方が楽しいので、だいたいの場合、無理やりにも付き合っているという事実を作り上げようとする。もしくは、お前、本当は好きなんじゃないの？みたいな展開に持ち込んだりするパターンも少なくない。ふざけないでほしい。俺は生粋の草食系なのだ。今日の弁当のメインは冷凍物のハンバーグではあるが、俺は純粋な草食系男子なのである。そんな噂はでたらめだ。

「やめてくれ。俺はそんなことができるほどの度胸は無い。」

「んー、そうか？意外と良い線いってると思うけどな。お前ら。」

「冗談。」

冗談にはやって良いものと悪いものがあるはずだ。新撰組の呪を受け続けてきた君なら分かるはずだろう。俺とあの人が良い線いってるなんて、そんな冗談ぞつとしない。

「またいなくなってる。」

なんと、老齢のサブローを無理やり押しつけ、子犬を探しながらその人は言い放った。サブローが悲しげに呻いている。

「また1匹いなくなってるよ。」

「そりゃあ、乳離れしたら、どんどん引き取られていくでしょうよ。」

「結局もう一匹の貰い手は見つかったの？」

「まだだよ。もしかして土崎さん所で貰ってくれんのか？」

俺が宿題から視点に移さないまま、なんととはなしに聞いてみると、問いかけにすぐには答えず、うーんと唸って今度はサブローの頭をなげた。子供3匹は絶え間なくサブローに体をすり寄せている。ちなみに貰い手が見つからないのは一番体が小さく、一番サブローから離れない一匹だ。犬を見に来た人たちは、あまりに母親にべったりな様子を見て、他の犬に選択肢を避けたのだった。この犬はきっと乳離れをするのも一番遅くなるだろう。しかし、それは無理からぬことなのかもしれない。この犬にとって、現時点で最大限に頼ることができる存在はサブローであり、頼ることのできる存在は

究極的にはサブローだけなのである。サブローは母親だ。子供は無償で親の愛を受けることができる。子供が親から愛を受けるために必要な要素はその親の子供であるというだけで十分に足りる。そして俺たちとは言えば、確かにこの親子の扶養役であると言っても最終的にはこの親子を引き離そうとしているからだ。俺たちは、個人の勝手に子犬を孤独に追いやるうとしているのだ。

「私が住んでるとこ、ペット禁止だから。」

「へえ、マンション暮らしだったんだ。」

「ううん、アパート。一人暮らし。」

シャーペンの動きが止まる。そして、俺はサブローを撫で続ける奴に目を移す。驚愕だった。この人、一人暮らしだったのか。一人暮らし、なんていい響きなんだ。一人。一人暮らし。この人はそんな素敵な乙な生活を送っているのか。個人的にはかなり興味深い素敵ワードだ。

「…へ、へえええ。そうなんぢゃ。」

「……どうしたの急に？」

土崎さんが怪訝そうにこちらを見てくる。やばいやばい。なんともペースを取り乱してしまった。一人暮らしなんて世界七不思議レベルの単語を急に語りだすから、動揺してしまったのだ。やばいヨダレが出ている。袖で口元を隠す。

「いいな。俺も一人暮らししてみたい。」

「そうかな？私は自分家から学校まで遠いから仕方なくのアパート暮らしだけど、色々一人でやんなきゃいけないから、結構きつついよ。」

「例えば？」

「朝起きてから眠い中ご飯作んなきゃいけないでしょ？時間ないときはそこら辺でご飯買ってくけどね。つくるだけならいいんだけど、ご飯食べて一息ついてからの食器洗いが萎えるよね。洗濯機まわしてから学校行く準備して、準備終わってから洗濯物干して、学校行くのなんて本当ギリギリなんだから。それでも家帰ってからまだま

だやることいっぱい、勉強する時間考えると部活なんて私には無理だし。あ、私中学の時は陸上部だったんだよね。まあ、いつか。とにかく一日中時間に追われてるの。オールデイ一人だからね。その分自由な時間があるっちゃあるけど。」

「ふーん、例えば？何すんの？」

「まあ、だいたい寝てるんだけどね。疲れちゃうんだもん。いかなよね。なにかやんないとき。あかんあかん。」

「良いんじゃない？俺も似たようなもんだけど。」

「人と比べてどうのこうのじゃないんだよ。それって、結局他人任せで他力本願じゃない？自分で考えて行動しなきゃね。」
うーん。難解なことを言う。

「そういえば、席離れちゃったね。残念残念。」

「あ？ああ、そうだね。でも土崎さんの方はかなりいい席とったでしょ。」

「……私、席替えって席が重要なんじゃないと思うんだよね。」

少しの間があいた後、思い出したふうな口ぶりで話題がふられた。ちなみに土崎さんの席は教室後方中央。これから寒くなる時期としては、窓際や廊下側よりもベターなポジションだ。しかしこの人は、席替えに関して俺と同じ考えを持っているようで今回の席に不満があるらしい。

「近くに誰か苦手な奴とかいんの？」

「そつゆうわけじゃないけどさ。」

そつゆうってなんだ。

「土沢君はどうなの？今回の席替え。」

「んー？悪くないよ。俺も席替えは周りが重要だから。むしろ良いくらい。」

「ふーん。前の席より？」

「……？前の席と比べて？」

何だその問いは。そこでイエスと言ったら、俺は嫌なやつじゃない

か。奴はサブローから目をそらさない。だけどサブローを撫でる手は止まっていた。俺は目ざとくそれを見つける自分に舌打ちしながら脳みそを動かす。回答を探す。

「それは、まだ分らないでしょ。」

奴の手がまた反復し始める。

その日もどうやら一日中雨が振り続けているみたいで。というか、この人は大概雨の日を狙ってやってくる。こいつが来る日は決まっ
てうちの傘立てに鮮やかな水色が追加される。爺ちゃん以外はビニ
ール傘愛好家のうちには不似合いな、自己主張の強いブランド傘だ。
奴はそれを引きぬいて玄関を開けて振り返る。

「うちのアパート、ペット禁止だけどさ。今大家さんがペット解禁
とか考えてるんだって。解禁したときはさ、考えとくよ。あの犬飼
えないか。」

「そーかい。」

「私だったらあのチビもいつでもサブローに会えるもんね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それは、犬にかこつけてまたうちに来るといふことか？それは歓迎
できない。だけど俺に限って、こんな申し出に明確な拒否、否定は
ありえない。だから結局こうなってしまうのだ。

「まあ、別にいいけど。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5695u/>

椿と雨の匂い

2011年11月16日09時53分発行